

# はばたきインクル支援だより



深谷はばたき特別支援学校 令和2年6月1日 No.21



発達障害のある子どもの中には、通院して薬物治療をしている人もいます。一方で、強く特質が現れて、子ども本人が大変そうな様子を見せていても、なかなか服薬が始まらないこともあります。今回は、発達障害のある子どもたちを支援するものとして、薬物治療の基本的な部分を学びましょう。

## 特集 ADHD への薬物

### 1. 何のために薬物治療をするのか？ —その目的—

まず ADHD の特徴とはどんなものでしょうか。文部科学省は次のように定義しています。

ADHD とは、年齢あるいは発達に不釣り合いな注意力、及び／又は衝動性、多動性を特徴とする行動の障害で、社会的な活動や学業の機能に支障をきたすものである。

また、7歳以前に現れ、その状態が継続し、中枢神経系に何らかの要因による機能不全があると推定される。 平成15年3月 文部科学省

#### (1) 子どもが感じている困難さの軽減

例： 周りが気になって先生の話が聞けない。

余計な一言を言ってしまったり友だちとのトラブルが絶えない。

#### (2) 子どもの持っている力を最大限に発揮させる

例： 家など静かな環境だと、何時間でも読書をしている。

好奇心が強く、積極性があり、人と接することも大好き。

**\* ただし、薬だけで ADHD が治るものではありません。**

### 2. 薬って安全なの？ —副作用が怖い—

新薬が許可されるまでには、様々な研究や試験を行い、長い年月と費用がかかっています。

- ① 基礎研究…薬となる可能性のある成分を発見したり、開発します。
- ② 非臨床試験…薬の安全性・有効性を確かめるために、動物を用いて研究をします。
- ③ 臨床試験…「治験」と言われるものです。人で有効性・安全性を試験します。
- ④ 承認申請・製造販売
- ⑤ 市販後の調査…有効性や副作用を調査する義務があります。

副作用のない薬はありません。薬の効果だけでなく、どのような副作用があるのか・どんな対応をすべきかも、医師から聞くようにしてください。



### 3. ADHD 治療薬の効果と副作用

現在、コンサータ・ストラテラ・インチュニブの3つの薬が選択できます。

	効果	副作用
コンサータ	ドーパミンに作用し、神経伝達物質の再取り込みを抑える。 気が散って課題に集中できない・注意の持続が難しい時に有効 1日1回(朝) 10~12時間の持続	食欲低下(ガスチモンという胃薬と併用) 睡眠障害 チックやてんかんのある場合は医師と相談
ストラテラ	ノルアドレナリンに作用し、神経伝達物質の再取り込みを抑える。 目先のできごとに振り回されることなく、物事を順序立てて考える時に有効 1日1回~2回(朝・夕) 24時間持続	上腹部の不快感(ドグマチールという胃薬が処方されることもある。) 頭痛 眠気
インチュニブ	情報を受け取る側の機能を調整 衝動性を抑え、我慢が必要な時に有効 1日1回(夕) 24時間持続	血圧の低下が原因の、眠気やふらつき 起立性低血圧や心疾患のある場合は医師と相談 グレープフルーツは禁止

\* 薬は一生飲み続けなくてはいけないのか？

薬が必要とされる困難さが軽減されるなど、服用が必要でなくなれば、減薬や断薬をすることができます。また、生活パターンにより、休薬日を設けることもできます。

また、本人が飲みたがらなくなった時や、期待される効果がなかなか現れない時には、医師に相談して中止を検討します。1でも上げたように、目的は子ども本人の困り感を改善することです。

\* 医師の指示通りに服用すれば、依存はありません。

### 4. 支援者として大切にしなければならないこと

子どもが薬物治療を開始すると「落ち着きが見られた」「あまり変化を感じられない」と周囲の大人目線で評価してしまうことがあります。子ども本人がどのように感じているかも大切にしてください。薬の効果も、自分自身に注意集中をしないと気付けない面もあると思います。「こういうところはどう」などある程度時間をかけて丁寧に聞くようにします。ADHD というものを子ども自身が理解することも必要な場合があります。

薬の効果があかなか見られない時に「全然効かないね」と子どもを責めるようなことは言わないようにします。また、薬の効果が見られた時には、「〇〇は本当によく効くね」ではなく、薬の力を借りつつも、努力した子ども自身に目を向けることが大切です。

服薬すれば ADHD が治るわけではありません。薬を飲み始める前も、薬を始めてからも、周囲の環境調整やソーシャルスキルトレーニングは必要です。

最後に、子どもたちの中には、薬を飲んでいることを周囲には知られたくないと考えている人もいます。子どもたちがどのような薬をどんな目的で服用しているのかを支援者が知ることは大切ですが、情報の取り扱いには注意が必要です。

